令和５年度　花立遺跡発掘調査概要

加茂市教育委員会

１　はじめに

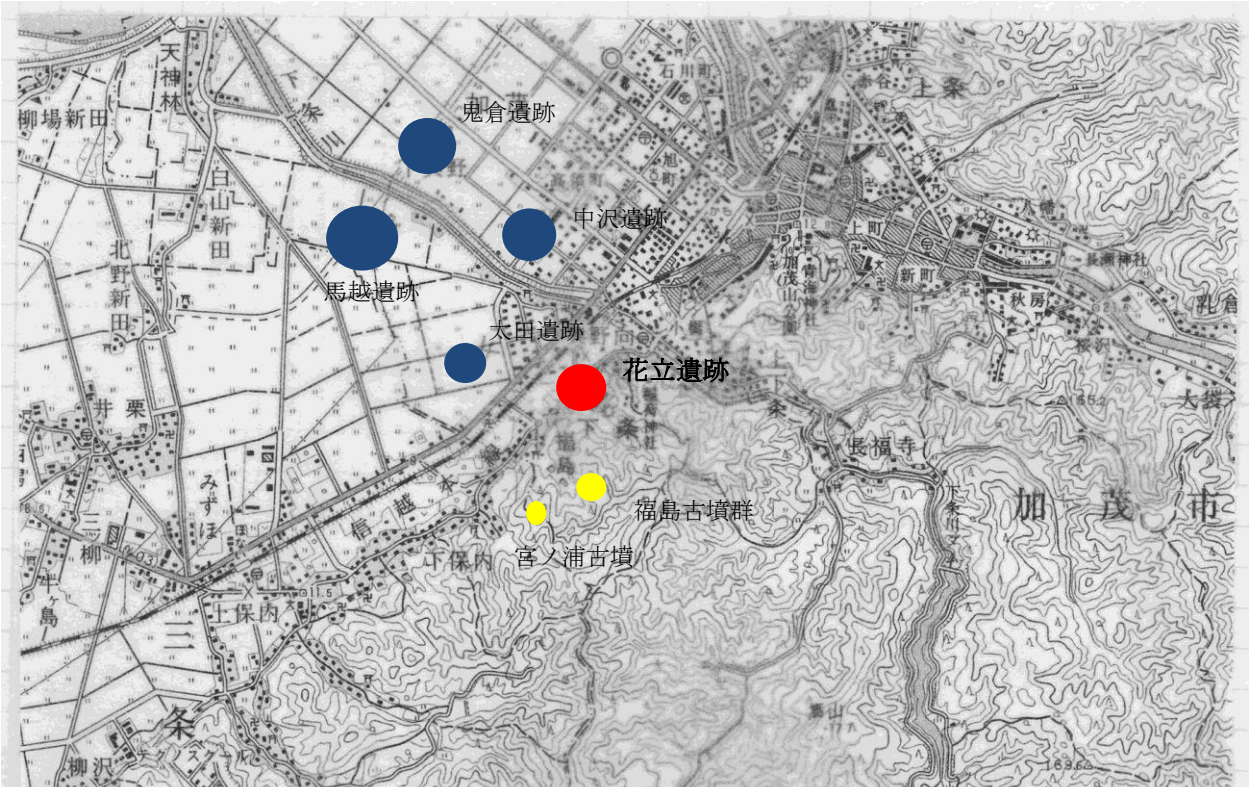
花立遺跡は加茂市大字下条字福島地内に所在し、平成５年に古代の遺跡として登録されました。市道福島線建設工事に先立ち、加茂市教育委員会が主体となり、令和２年度約９１４㎡、令和３年度約４６９㎡、令和４年度約６８２㎡の発掘調査を実施してきました。令和５年度の調査面積は約２３９㎡です。

２　立地と周辺の遺跡

花立遺跡は下条川左岸の丘陵縁辺部に位置し、緩やかな傾斜を持つ微高地に立地します。現在の水田面の標高は約１３ｍ前後です。

下条川流域には多くの古代の遺跡が確認されています。発掘調査された遺跡は右岸側で鬼倉遺跡、中沢遺跡、左岸側では馬越遺跡、太田遺跡があります。ほとんどが８世紀中頃に集落が開発され、９世紀中頃～後半を主体とし、１０世紀前半頃まで継続しています。

花立遺跡の後背部の丘陵には宮ノ浦古墳（１基）、福島古墳群（５基）が所在し、古墳時代前期の古墳と考えられています。



花立遺跡と周辺の遺跡位置図

３　遺構について

調査区全域から、大小様々な遺構が約１５０ほど見つかりました。全容は把握できませんでしたが、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）２棟が確認されました。梁間２間×桁行３間（約５．２ｍ）が１棟、梁間２間（約４．０ｍ）×桁行４間（約４．０ｍ）が１棟で、ともに比較的小規模な建物と推測されます。遺構の切り合い関係（新旧）や主軸の向きが異なることから同時に存在した建物ではなく、時期差を持つことが考えられます。

また、今年度の調査区で特筆される遺構は、井戸です。２基確認されています。ともに直径約１．２ｍの円形で、６２８は深さ約０．７ｍの素掘りの井戸です。埋土の上部から須恵器無台杯などが出土しました。７３４も深さ約０．７ｍで、遺構を検出した面から約３０㎝下から、木製の井戸枠が現れました。これは、横板を井桁状に組み上げた構造で井籠（せいろう）組と呼ばれます。木枠の規模は約５０㎝四方の正方形で、現状で三段の横板が見られます。遺物はほとんど出土していません。市内で良好な木枠を持つ井戸が確認されたのは初めてです。

このほかに、細長い溝は同じ方向で、ほぼ等間隔で確認されたものは畝状小溝と呼ばれ、畑の畝間の跡の可能性があります。

４　遺物について

今回の調査区からは、それほど多くはありませんが、これまでと同じく須恵器（すえき）・土師器（はじき）が出土しています。須恵器は大半が佐渡の小泊窯（こどまりよう）産のもので、年代は平安時代の９世紀中～後半頃が中心です。ほかに目立った遺物はありませんでした。

５　まとめ

花立遺跡では、これまでの調査で多量の墨書土器の出土や大型掘立柱建物が確認されるなど、有力者の存在が明確となっていましたが、今回の木製の井戸枠を持つ井戸（７３４）もそれを補強するものと考えられます。

最後になりますが、今回の発掘調査を実施するにあたり、近隣にお住いの皆様、関係機関の方々から多大なご協力を頂いております。この場をお借りして感謝申し上げます。